

# 令和4年度 調査研究事業（研究報告）

## 1 施設名

ポプラ保育園

## 2 研究テーマ

子どもたちの豊かな表現活動を保障するために、  
様々な素材や画材の特性を知り、環境設定に活かす方法を考える。

## 3 研究内容

### （１）実施期間

令和4年6月1日～令和5年3月31日

### （２）講師の所属・役職・氏名等

(株)サクラクレパス コルサポート事業部所属講師

大阪人間科学大学 仁木裕美氏

### （３）研究のねらい

子どもたちが主体的に素材に働きかけ、試行錯誤したりイメージを膨らませていくような造形あそびをこれからたくさんつくっていくためには、まず保育士自身が素材や画材の特性を知り、活動の丸ごとすべてが「作品」になるという共通認識を持つ必要がある。実習を通して体感しながら、この認識を深め今後の環境設定に活かしていく。

### （４）研究対象児童

ポプラ保育園・千代崎ポプラ保育園の全園児・全職員

## 4 実践内容

○6月21日／23日

各クラスの造形あそびの作品や描画を持ち寄り、発達の特徴がみられると感じた箇所を自由に出しあうワークを行う。

○9月3日

大阪人間科学大学 仁木裕美先生を招き『幼児の造形活動基本～保育者自ら 実践を通して様々な画材の特性を知る～』というテーマで講義・実技研修を受ける。

○11月2日／15日

大阪人間科学大学 仁木裕美先生を招き『フィンガーペインティングを楽しもう』というタイトルで、泥絵の具をつかって部屋一面に15mの巨大なロールクラフト紙をひろげ、実技研修を受ける。

○2月10日／16日

千代崎ポプラ保育園5歳児14名を対象に公開保育という形式でこれまでの研修内容を理解して実践できるのかを検証してみる。参加者が自由に感じたことを出しあい、遊んでいる様子を公開日誌(保護者向けに配信するドキュメンテーション)の形で記録するワークも併せて行う。



## 5 研究のまとめ（研究成果）

・新しい画材や技法をたくさん体験したことで、この楽しさをこども達にも伝えたいと各クラスの保育の中に積極的に取り入れることができた。

・こどもの興味・関心・行動は心身の発達と密接に関りあいながら変化していくことが確認でき、こども達に提供する画材・素材の質や量、大きさ、数、準備の内容などをよく考えるようになった。

・どのような表現の仕方でも大丈夫だと受け入れてもらう心地よさを保育士自身が体感し、こども達の発するものを受け止めようとする姿勢がさらに強まった。

・フィンガーペイントの体験をとおして、最初からでき上りの姿が決まっているような造形活動と、こどもが夢中になって手を加えていくことで、思いもかけなかったおもしろいものが出来上がる造形活動のちがいがクリアになった。

・保育のねらいや伝えたいことがはっきりしていると保護者向けのおたよりも短時間で効果的につくることができることが実感できた。

・公開保育で客観的に保育を観察しての職員の学びが大きかった。こどもの発話に丁寧に応えようとした結果、保育士の予想を超えた思いがけない発見・気づきの活動が生じたことにより、これから、丁寧にことばを聞くことを意識しようという気持ちにいたった職員が多い。

## 6 課題

クリスマスやひなまつり、作品展など行事を前にすると、どうしても見栄えのするものをこども達に作らせたくなくなってしまう。そのような造形活動の中にもハサミや糊の使い方を知ったり、新しい技法を知ったり、話を聞いて順番に工程を追えば失敗が少ないので安心感がもてたり・・・といった、こどもにとって有益なことがたくさんある。そのことを知っているからこそ、保育の中での「造形」「製作」のスタイルは均一的なものからの脱却が難しい。これらの活動を否定的にとらえるのではなく、これらを残し、あるいは土台にしなが  
ら、非認知能力を高めるような造形活動、ポプラ保育園の保育理念にある「思ったこと、感じたことを自分自身で受け止め、それらを自らの力で表現できる子」をはぐくむような保育をつくっていききたい。こどものありのままを受け止め、こどもが安心感を感じ、夢中になってどんどん働きかけたくなるような素材と環境を用意しようというメッセージそのものは、今回のとりくみで伝わったかと思う。だが実際に計画して行おうとする活動がどの位置づけにあり、何をねらいにしているのか、という視点を持ちながら実践を重ねていくのはこれから先のことになる。その都度その都度、職員全体で検証していきながら積み重ね、確かな認識にする必要を感じている。

# 令和4年度 調査研究事業(研究報告)

## 1 施設名

わかば保育園

## 2 研究テーマ

怪我のしにくい身体作り

## 3 研究内容

### (1)実施期間

2022年4月～2023年3月

### (2)講師の所属・役職・氏名等

オカモト体操スクール

外部講師 鬼頭 孝佳

### (3)研究のねらい

楽しく、身体と脳を使いながら、幼児特有の身体のぎこちなさをしなやかにし、転倒しにくい、転倒しても怪我のしにくい身体をつくる。

### (4)研究対象児童

3歳児～5歳児(139名)

## 4 実践内容

2022年4月、5月では、毎月4～7名の園児が転倒し、顔(口腔、おでこ等)の怪我の報告があり。

その原因として、

(1)園庭の砂により滑り、バランスを崩して転倒する

(2)転んだ時にとっさに手が出ず、頭や顔をケガしてしまうことが大きいと考えられた。

そこで、オカモト体操スクールの外部指導員の鬼頭コーチの指導のもと、

(1)バランス感覚を養うと共に、身体のバランスを維持できる身体作りとして、股関節の可動域を広げる遊び

(2)手を身体の前に出すことに慣れ、また自分の身体を支える腕力を養う遊び

(3)瞬時に身体が思うように動かせられるように、脳と身体神経とを意識した遊び

(4)身体作りだけでなく、他児との関わる活動を通して、身体を動かすことが楽しいと感じると共に、他児への意識を持ち助け合いができる環境を設定

以上のこれらを体育あそびの中に取り入れることとした。

活動写真①は、股関節を前後に伸ばす動き(跳び箱の上からジャンプして着地した後は四つん這いで進むように、受け身の動きになれる)

活動写真②は、長椅子にまたがり進む事で、股関節を左右に広げ、且つ自分の腕の力で自分の身体を引っ張る力を意識する。

活動写真③は、腕で自分の身体を支える動きを、他児と関わりながら行うことで、より楽しく取り組める

活動写真④は、不安定な足場を作ることで、バランス感覚を養いながらも、自分自身の左右の足の動きと着地場所等を考え取り組むことで、更に自分自身の身体への意識が高まる。

活動写真⑤は、エアマットの不安定な足場で、ジャンプをしながらバランスを保ちながら進むと同時に、他児と一緒にすることでよりバランスを保とうと意識すると共に、一緒に身体を動かすことを楽しいと感じる。

活動写真①



活動写真②



活動写真③



活動写真④



活動写真⑤



## 5 研究のまとめ(研究成果)

身体を動かすことに苦手意識を感じている子どももいることから、難しい課題ではなく、アスレチック的な遊びを提案し、サーキット形式を取り入れることで、最初は上手くできなくとも、次は上手くやろうと、できる内容とした。

保育士が最初に設定された遊びのコースを指導員の指示の下、子ども達の見本として行うことで、保育士も大人にとっては簡単そうに思える遊びであっても、ドキドキする感情や、手足をどう動かすか悩んだり、できない動きもあり、そうしたことを踏まえ、子ども達に共感した声かけができるように、配慮した。

また子ども達にとって、親しみのある保育士が一つ一つの遊びの課題を進むのを興味深くみて、実際自分たちが行うときには、ほぼ園児が指示と異なる動きをすることはほぼなかった。あったとしても、他児と一緒にする動きも入れているため、子ども同士で教え合いながら楽しむ姿があった。

更に、何度もチャレンジできることも子ども達も知っていることから、できなくても次にまだできるという思いもあり、癪癪等やこだわりをみせる園児もいなかった。

そして、ゆっくりと、そして保育士の援助を受けていた園児も、2, 3回行うときには、保育士の援助を拒み自分の力だけで試みようとする姿も多く見られた。

子ども達にとって「できそう」な遊びが課題であり、何度とチャレンジでき、友達と一緒にやるもの、応援をしながらか行い遊びと、活動を重ねるごとに内容を友達を意識する内容へ展開していくことで、どの子ども達も楽しく、体育あそびに参加することができた。

転倒による顔の怪我の回数は以下の通り減った。一方で活動がより活発になることで、園児同士がぶつかっての怪我が増えることとなった。

〔転倒による怪我(顔)の回数の比較〕

月	2021年度		2022年度	
	転倒による怪我	園児同士衝突による怪我	転倒による怪我	園児同士衝突による怪我
4月	7	0	7	0
5月	7	0	5	0
6月	4	0	4	0
7月	3	0	0	0
8月	屋外での活動回数少なし(ほぼ色水遊び、感触遊び)のため、転倒等の怪我報告なし			
9月				
10月	4	0	1	0
11月	5	0	0	1
12月	5	0	0	3
1月	4	0	0	2
2月	3	0	0	0
3月	2	0	0	0
合計	44	0	17	6

## 6 課題

転倒により手がかず、顔の怪我の報告が、前年度と比較しても、また今年度の前期の報告回数からも、秋には転倒による怪我がなくなり、驚くような結果となった。

子ども達にとっても体力がつき、活動が大きくなったことで、園児同士が周りを見て動く、危ないと思ったときに止まったり、身体をかわす等のことができず、衝突による、顔の怪我が、昨年までほぼなかったような怪我が見られるようになった。

このような周りを見て、自分自身の身体をそうコントロールすべきかの遊びが、求められる。

小さなエリア内で友だちと身体を動かす中でぶつからないように周りを見て、止まるか、横に逃げるか、さがるかなど、どう振る舞うことがいかに自分で考え、自分の身体をコントロールして遊ぶ遊びを展開していく必要がある。

3歳児以上より、今回の取り組みを行っているが、来年度に3歳児に進級する園児には、この活動を取り入れながら、3歳児以上の進級時には、周りをみながら身体をしなやかに動かす遊びを取り入れ、子ども達が怪我することなく、充分に身体を動かし、楽しく遊べる環境と身体作りに取り組んでいく必要がある。

# 令和4年度 調査研究事業（研究報告）

## 1 施設名

愛信保育園

## 2 研究テーマ

韓国・朝鮮のノリ（歌）やノレ（遊び）を通して、お互いの国籍や文化に触れ、違いを認め合い、尊重する心を育てる

## 3 研究内容

### （1）実施期間

2022年4月1日～2023年3月31日

### （2）講師の所属・役職・氏名等

音楽ひろば講師 大塚七三生

ノリマダン（遊びの広場）講師 邊美羊

### （3）研究のねらい

本物の楽器に触れ、音楽の楽しさを伝える。  
民話や歌、手遊びなどを通して韓国・朝鮮の文化に慣れ親しむ。

### （4）研究対象児童

3歳～5歳 （異年齢クラス） 77名

（2023年3月現在）

### （5）指導計画

別紙参照

## 4 実践内容

音楽ひろば

- ・音楽に合わせて身体でリズムを表現する。  
ピアノのリズムに合わせて、強弱をつけたり、高い低い音に分けて色々な動作や自由に表現をして楽しんでいた。  
お友達とグループでかかわりを持ちながらリズム遊びをしたり、リズムをとっていた。
- ・楽器活動としては、マリンバや鉄琴、打楽器、タンバリンや、ピアニカも自分がやってみたいと思うもので、経験することで子どもたちに楽器への興味を持たせたりすることで集中することに繋がっていた。
- ・クリスマス祝会でみんなと一緒に合奏をすることで、仲間意識を高めるとともに、達成感を味わう。
- ・年齢の小さな子どももマラカスやトライアングル、タンバリンや鈴などで、楽しんで参加する意欲を養う。

ノリマダン（遊びの広場）

- ・上半期：挨拶・春の花・私の家族・遠足・雨の日・夏の果物
- ・下半期：秋の自然・クリスマス・お正月・ユンノリ（遊び）  
寒い冬・元気な生活・進級へむけて等一年を通じて、季節の移り変わりや、習慣（習わし）などを知る機会とする。



## 5 研究のまとめ（研究成果）

- ・音楽ひろばの講師の先生が来ると子どもたちが喜んで音楽遊びをする姿が見られた。
- ・異年齢で最初は戸惑う年中児もいたが、次第に他児の楽しむ姿を見て心がほぐれて伸び伸びと楽しむ姿が見られた。表現も豊かになった。
- ・弱視の児童もあり、色々な音の楽器に出会って楽しむ姿が見られた。
- ・合奏の取り組みで、はじめは自信なさそうに取り組んでいたが、みんなとできることで自信に繋がった。
- ・韓国・朝鮮の文化などノリやノレ、民話やペープサートなどのツールにより、こどもたちにスムーズに伝わり、楽しく参加する姿が見られた。
- ・お互いの違いを認め合い、大切にできる、尊重し合える心を育てる大切な取り組みである。



# 令和4年度 調査研究事業（研究報告）

## 1 施設名

大阪YWCA大宮保育園

## 2 研究テーマ

絵本の読み聞かせやわらべうたを通して、  
子どもの情緒の安定や想像力、感受性を育てる

## 3 研究内容

### （1）実施期間

2022年9月～2023年3月

### （2）講師の所属・役職・氏名等

大阪YWCA千里子ども図書室代表・翻訳家 上田由美子

大阪YWCA千里子ども図書室語り手・山本淳子（元保育士・梅花女子大学非常勤講師）ほか同図書室語り手5名

### （3）研究のねらい

絵本の読み聞かせやわらべうたを通して、乳幼児の中に育まれる、大人との愛着関係や、情緒の安定や想像力、感受性、生きる力について、継続的に関わり実施することで、どのような変化が子どもの中に見られるかを保育者が観察する。保育者が子どもと一緒に絵本を楽しみ、絵本の世界の広がりや、それが子どもの成長に与える力を学び、子どもの心の成長の糧となる絵本を探す力を高める。

### （4）研究対象児童

大阪YWCA大宮保育園 園児0～5歳児

## 4 実践内容

1. 子どもへの読み聞かせ、わらべうた遊び等）  
9/16（金）～3/9（木）まで、0歳児～5歳児を対象に、語り手が月2回のペースで来園、延べ73回のおはなし会を実施。  
年齢別で見ると、0歳児（1クラス）7回、1歳児14回（2クラス）、2歳児14回（2クラス）、3歳児14回（2クラス）、4歳児14回（2グループ）、5歳児10回（2グループ）のおはなし会が実施された。内容、ふりかえりは別紙①参照。

### 2. ふりかえり

3/15（水） 千里子ども図書室メンバーと保育士とで、ふりかえりの時を持った。

### 3. 職員研修

1/14（土） 講師：上田由美子（大阪YWCA千里子ども図書室代表）

内容 「子どもの心をはぐくむ言葉：絵本とお話」

参加人数 職員24名 ふりかえりは別紙②参照



## 5 研究のまとめ（研究成果）

同じ人から継続して読みきかせやわらべうた遊びをしてもらう経験を通して、最初は緊張していた子どもたち、特に乳児クラスの子どもたちも、次第におはなし会に来てくださる語り手の方や、その雰囲気になれ、楽しみに待つ姿や、自ら近づいて手を触れるような姿も見られるようになった。くり返し経験すること、愛情を持って接してくれる大人との間に愛着関係が育まれ、その安心感の中でお話を楽しむことができるのだと再確認することができた。回を重ねるごとに、子どもがお話を楽しむ力、集中力も増していく様子も見ることができたが、それは即席に育つものではなく、日常のなかでゆったりとくり返し、ずっと行っていくことが大切なのだろうと思う。

おはなし会が終わった後も、わらべうたを口ずさむ子どもがいたり、初めてのわらべうたでも途中から一緒に声を合わせることができたりと、子どもにとってわらべうたが、ここよいリズム・音程・ことばなのだとすることを改めて感じた。自分たちがわらべうたを覚えて、もっと歌ってあげようと思った保育士も複数いたようなので、ぜひ習慣にしていけたらと思う。

子どもがおはなし会にスムーズに入っていけるよう、動線や環境を整えることにも気を配った。幼児では普段たてわり保育を行っているが、年齢に応じて絵本を楽しむために、おはなし会は年齢別で行った。そのため、おはなし会の際には、普段のたてわりの保育室から、横割りの部屋へ移動することが必要だった。いつもと違う「おはなしの部屋」に出かけて特別感を味わうのは5歳児に限るようにして、3、4歳児は馴染のある部屋でお話を聞いた方がよいのかもしれない。今後も考えながら工夫していきたい。

話し手を招いておはなし会を行う形で行ったため、ゲストである話し手から「受ける」、「学ぶ」というスタンスになり、子どもたちが愛着関係のある大人から、継続的に、温かい言葉でお話を聞く体験のためには、保育士がそれを行うのが何よりである。今後継続していく中では、経験のある話し手の方々から教えていただきつつ、自分たちが実践していく方向にシフトして行ければと思う。

職員研修を通して、子どもが絵本やことばを通して、現実世界の事象を理解していくこと、「本物」と「ことば」がピッタリ合った時に、ものごとが腑に落ちる体験を繰り返していくことを学んだ。おはなしの中で体験することを、遊びや生活の中で実体験として行うことが保育ではできる。例えば、1歳児のクラスで、「おもちゃ」の絵本を読んだあと、実際に餅を焼いてみて、餅が膨らむ様子を見てみたり、その日の午後思い出したように餅に触って感触を確かめる様子があった。また、とんぼ、月、雪など、生き物や自然を題材にした絵本やわらべうたに触れ、季節を味わうことができた。そのようにして子どもの体験を広げていきたい。

## 6 課題

・おはなし会の中で、絵本や小道具を使わない素話の時間もあり、主に3～5歳児の幼児クラスが対象であったが、耳で聞いてストーリーを理解したり、情景を思い浮かべるのは難しそうな様子があった。言葉のみで語られるおはなしを理解できるようになるには、積み重ねが必要だと感じた。素話でお話を語るには、保育士自身がその楽しさを知ったり、お話のストックがないとできないことなので、理解を深めたい。わらべうたも、積極的に覚えていきたい。

・継続的に同じ人からお話を聞くことで育まれる愛着関係や、積み重ねによって子どもがお話の世界を楽しむキャパシティや、集中力も増していくと感じたので、「ゲストに来てもらう」体験から、「保育の中に取り入れて日々自分たちがやってみる」方向へと進んでいきたい。

・「子どもにとってよい絵本」を選ぶことには、まだまだ時間が必要である。この絵本が子どもの成長にどのような良いものをもたらすかを、自分なりに考え、周りとも意見交換しながら、見る目を養いたい。



# 令和4年度 調査研究事業（研究報告）

## 1 施設名

長居保育園

## 2 研究テーマ

医療的ケア児との生活を通して  
インクルーシブ保育の原点に立ち返り実践に繋げる。

## 3 研究内容

### （1）実施期間

2022/4/1～2023/3/31

### （2）講師の所属・役職・氏名等

インクルーシブ（共生）教育研究所 代表 堀智晴先生

大阪聖和保育園 事務局長 森本宮仁子

### （3）研究のねらい

インクルーシブ保育から、私たちが育てたいと願うことの意味を具体的に再考し、大人も子どもも共に育ちあう保育を目指す。

### （4）研究対象児童

長居保育園園児

## 4 実践内容

1. 事例検討から、他者を理解しようとし、気持ちを想像し自らの関りを変えることから見えてくる保育の営みにより保育者自身が保育の本質に気づき、日々の保育で実践する。
2. 全ての園児がもつ課題に対して、保育者の願いが強くなりすぎていないか、従わせていないかなど、「対話」を通して、物事を多面的に捉えていく考え方を身につける。
3. 対象児を中心に、保育の場面をビデオに撮り、本児理解、また周りの他児との関係や育ちに着目し、私たちが育てたい子どもの姿を明確にする。
4. 日本の教育現場の現状を踏まえて、インクルーシブ保育をどう考えていくのか、方向性を定める。



## 5 研究のまとめ（研究成果）

昨年度は、新型コロナウイルスの影響で、予定通り研究を進められず、非常に残念に思いましたが、引き続き同じ研究テーマに取り組める機会を与えていただき感謝いたします。

今年度も、堀智晴先生、森本宮仁子先生に、5回の研修会でご教授いただきながら日々の保育で、インクルーシブ保育を意識しながら実践し、私たちが目指す保育とは何かを明確にしていくということを目的としていたが、コロナウィルスとインフルエンザの蔓延により、4回の実施となる。

### 内容1：事例検討

人を評価したり批判ではなく、一番大切なのは、保育者自身が、どう子どもに向き合っているか、相手の気持ちはどうであったか、どんな風に自分に関わろうとしているか、関わってきたかの振り返りである。また、事例で上がったケースは、対象者だけの問題ではなく、それぞれが抱えている問題であり課題であることに気づかされ、後の保育に生かすことができた。

### 内容2：オープンダイアログ

今回は、3人の職員でオープンダイアログを試みる。職員皆、初めての体験で戸惑いもあったが、対話を通して各々自ずと見えてくる方向性、本人が持つ願いに気づかされる瞬間があった。そのことを踏まえながら、私たちの保育を振り返ることができた。子どもの思いや意思を尊重する保育をしたいと願いつつも、私たちは、保育の中で、子どもを大人の願いに従わせたり、あってほしい姿に子どもたちを誘うことが目的になっていたり、成果だと思ってしまうことが主になってはいただろうか。こどもとの関係の中から、対話を通して自ら育ちあえる保育を目指していきたい。「自ら育つ姿」を信頼する保育、という概念の共通認識ができたように感じた。

### 内容3：対象児童の活動場面をビデオに撮り、検討する。

同じ動画を繰り返し視聴し、環境に共鳴していると思われる場面、その姿から心の動きを想像してみること、周りの子どもとの関係性からの育ち合いに繋がるのではないかとと思われる場面など、何でも気が付いたことを皆で出し合う。

●歌を歌っている時目を細める場面。口が動く。→歌詞が好き？ピアノが好き？歌っている？

●隣で他児が気にしてずっと見ている。隣で屈伸をする。→見られていることが分かっている？屈伸する振動が伝わっている？

●看護師が手を取り、リズムをとる。→嬉しそう。

●喀痰吸引の場面。→顔をしかめる。嫌いなのかな？など。視聴を繰り返すごとに、新しく見えてくる場面が増え、また、参加者全員で行ったので様々な気づきがあり、多面的に捉えることでさらに、子ども理解に繋がったと感じた。職員の感想から、受け入れた当初より確実にインクルーシブな考え方が定着し、大人も共に育てられている実感があった。

### 内容4：インクルーシブ保育のまとめ

インクルージョン=全ての子どもを社会の一員として包み込んで必要な支援を保障する。

インテグレーション=もともと分離させられ保育を受けていた障害のある子どもたちを障害のない子どもたちに合流させ一緒に保育、教育を受けさせる。統合保育。

インクルージョンしているつもりでいるが実は場を統合しただけではないだろうか、という実践の振り返り、見直しが必要である。私たちが行ってきたことの意味を整理することができた。

## 6 課題

6年前、対象児童との出会いがあり、医療的ケア児の保育について考える機会が与えられた。当時、自分の子どもがどこにも受け入れてもらえない悲痛な思いや、障がいの重さによって、いつ状態が急変するか分からないという緊張感の中で、子育てをしていると言う話を聞いた。福祉施設としてサポートしていきたいと思い、環境を整え2年後に受け入れた。しかし、受け入れただけではインクルーシブにはならない。受け入れたことがゴールではなくスタートである。どのような意図で子ども同士の関係性の中で何を育てたいのかを明確にすることが必要である。

誰も排除されず一緒に生きていける社会が当たり前だと感じられ、その子どもとの関係を通して次の出会いがまた新たな豊かさを生む、違うことは豊さであり、認められている安心感の中で自分もまその一員であることを認識できる社会を子どもたちと微力ながら築いていきたい。